

ニューズレター 別冊

全国公共図書館協議会

(〒106-8575 東京都港区南麻布5-7-13)

平成28年1月20日

(東京都立中央図書館内)

【全国公共図書館協議会研究集会講演記録】

テーマ M L A*連携の起源と展開 - 連携の要としての公立図書館の可能性

*M: museum, L: library, A: archives

講師 独立行政法人国立美術館 東京国立近代美術館 水谷 長志

平成27年7月3日(金)に開催された全国公共図書館協議会研究集会の講演記録を別冊としてまとめました。

今回は、M L A連携の基礎知識や現状と課題、今後図書館に求められること等について、美術館側の視点から御講演いただきました。

なお、この講演記録は実際の講演内容を再構成したものです。レジュメとあわせてお読みください。

はじめに

今日は、「M L A連携の起源と展開 - 連携の要としての公立図書館の可能性」というお話をさせていただきますが、私はミュージアムの中の図書室、ライブラリの人たちといろいろ一緒に仕事をしています。もう少し広く言えば、専門図書館の方々と一緒に仕事をしたり、話をしたりすることが多いです。今日は、公立図書館の館長さんもたくさんいらっしゃるようですが、その方にお話をしたり、ご意見を伺ったりする機会は非常に少ないので、今日は本当にいい機会をいただいたと思っております。

M L A連携の問題というのは、私の30年の仕事のかなり大きな意味合いを持っているので、自分史みたいなのを語るようなところがあっていささか気恥ずかしいですが、今日は大体こんなテーマになります。M L A連携の起源として、ミュージアムの中のライブラリ、それからアーカイブ、特にアートアーカイブ、それからM L A連携というのは2つのタイプがあって、

2つのM L A連携の形ということの起源についてお話をします。

次に、連携の展開ということで、M L A連携が広がっていく、それからM L A連携が一体どういうものかということをお話するときに、1つの共通の課題がある。その課題についてお話をしていきたい。

また、連携の要として、皆さんがお仕事をされている現場としてのパブリック・ライブラリ、公立図書館というのは非常に可能性があると思います。その可能性について。

そして、M L A連携の新たな起源が、3.11から始まった側面がありますので、それを最後にお話ししてめめたいと思います。

ともかく、今さらM L A連携の話かよと思われる方もいらっしゃると思いますし、あるいは、M L A連携は知らないな、聞いたことないなという方もいらっしゃると思いますので、順次連携というのはどういうことかをお話ししていきたいと思います。

1 M L A連携の起源(1) ミュージアム・ライブラリ

1.1 ミュージアムの中のライブラリ

まず、M L A連携の起源というのは、いわゆるミュージアム・ライブラリから始まったと言っていいかと私は思います。例えばミュージアムの中にライブラリがある。私が仕事を始めたとき、東京国立近代美術館には書庫はありましたが、図書室はありませんでした。それが30年たって、今はかなり良いというか、利用者の多いミュージアムのライブラリがだんだん増えてきた。その歴史というのが、M L A連携の一つの起源になっている。

東京国立近代美術館の2階にあります本当に小さな図書室が、私が今仕事をしている図書室です 写真1。閲覧席も10ぐらいですね。検索端末があって、奥に閉架書庫がある。非常に限られたスペースですが、資料数は多いです。十数万になっています。



写真1 東京国立近代美術館アートライブラリ

比較的大きいのが東京都現代美術館の図書室。実は、美術館の中の公開の図書室というのは、東京都現代美術館の前に上野の東京都美術館の地下に図書室ができたわけですが、それが1970年代の末なんですね。それが日本における公開のミュージアム・ライブラリのはりでした。

1.2 ミュージアムの中のライブラリの連携

こういったミュージアムの中の図書室とい

うのが、一緒にいろいろな連携を始めております。ミュージアムの中のライブラリの連携ということで、2004年にA L C、Art Libraries, Consortiumというのをつくりました。それはどのようなものかといいますと、東京国立近代美術館、国立新美術館、横浜、西洋、東京都現代、写真、東京国立博物館、江戸東京博物館、神奈川県立近代美術館といった9館11室のライブラリのO P A Cが連携するようなシステムをつかって、いろいろな共同体の活動をしている。ミュージアムの中の、すなわちM Lの、ミュージアム・ライブラリの連携の組織というのがこういう形でできています。

ここに挙がっている9館というのは、東京都と横浜と葉山ですけれども、関東に偏っている。ミュージアムの中のライブラリというのは関東にしかないというと、そうではなくて、今日もいらっしゃっていると思いますが、愛知の芸術文化センターの中にすばらしいアートライブラリがあります。それから、兵庫県立美術館の中にもすばらしいアートライブラリがありますけれども、そちらはA L Cに参加していただいていませんが、そういう連携が始まった。

ちょっとお時間をいただいて、Art Discovery Group Catalogueのプロモーション・ビデオをお見せしたいと思います。実はM L Aの連携を推進する大きな役割を果たしているのがミュージアムのライブラリで、それは日本でA L Cのような形で展開するだけではなく、特にヨーロッパ、アメリカで今大きなチャレンジングな仕事が進んでいます。ミュージアムのライブラリで何が進行しているかというのがよくわかるので、それをご紹介したいと思います。アメリカの書誌ユーティリティであるO C L Cがインフラをつかって、その上にヨーロッパ、アメリカの主要な美術館のライブラリが連携する仕事をしております。

今映っているのは、アムステルダムの国立美術館です。最近ドキュメンタリー映画ができて、とてもすばらしい。レンブラントの「夜警」のある美術館で、その中に、ヨーロッパで

も有数の美術図書館があります。

これはオランダ語ですが、話しているのは、国立美術館の中の図書館長。これが図書館です。すばらしい図書館。何を言っているかという、美術というのは、さまざまな情報に取り囲まれている。作家は誰なのか、いつ描かれたのか、どのようにして描かれたのか、それは今どこにあるのか、どういう素材でつくられているのかといった情報です。その美術作品についての情報を担うのが、我々アート・ミュージアム・ライブラリで、そのためには、革新的な情報システムをつくらなければならないというメッセージを、国立美術館の中のライブラリアン、図書館長のクート（Koot）さんが、ずっと話しているわけですね。

いろいろな欧米の主要な美術図書館が連携して、システムをつくっている。日本ではALCのような形で横断検索システムが動いていますが、それと同じように2014年にOCLCがベースとなって、Art Discovery Group Catalogueというものを展開している。それは、ある意味で情報システムという点においては最も先端的な、チャレンジングな仕事です。アート・ミュージアム・ライブラリにとっては、それがここで進んでいるということがわかります。

ここで展開される美術の情報というのは、作品の情報や、アートライブラリの情報、アートアーカイブの情報等があり、全ての情報をワンストップで検索できるようなシステムをつくらうというものです。クートさんが構想して、今、主要な世界の美術図書館が展開しているということがあります。OCLCですね。こんなことをお話ししたいと思います。

2 MLA連携の起源(2) アートアーカイブ

2.1 アートアーカイブ その「概念」との遭遇 1988

では、どうしてアート・ミュージアム・ライブラリがMLA連携の先頭に立っているのかということ、もう少し歴史を追ってお話した

いと思います。

美術を美術館で鑑賞するときによく言われることは、作品と見る人が対峙する、それが基本的な鑑賞である。これは全く正しい。しかしながら、ミュージアムの中の人間、あるいは美術を研究する人たちにとっては、作品を見るだけでは何も動いていきません。研究が進んでいかない。

もう一つ言えることは、作品があって、あるいは作家がいて、その作品と作家について研究をするとき、当然のことながら研究するわけですから、作品なり作家について書かれた本を読むわけです。そうすると、ミュージアム（M）のコレクション、それからライブラリ（L）のブック、この2つで研究が始まる。しかしながら、MのコレクションとLのブックだけでは、研究は進まない。そうですよね。作品があって、本を読んでいるだけでは、先行研究をなぞっているだけです。新たな研究成果は出てこない。

新たな研究成果を往々にして作り出すのは、作品と著作、本、ライブラリのブックだけではなくて、もう一つの要素として重要なのが、本になっていない、本になる以前のさまざまなアーカイブ（A）というのが出てくると、研究はぐんと進みます。

例えばゴッホの研究が非常に精緻に進むのはなぜかということ、ゴッホがあれだけの手紙を書いているからです。ゴッホの手紙というのは本になっていますけれども、もともとは手書きのアーカイブだった。ですから、ゴッホの作品とゴッホについての本だけでは研究は進まないのですが、本になる以前のアーカイブとしてのゴッホの直筆の手紙があったがゆえに、ゴッホについての研究は一段と進むということになります。

ですから、MLA連携の起源の重要な要素は、MとLと第3の存在としてのアーカイブ（A）ですね。皆さん図書館にいらっしゃるの、ライブラリ、ミュージアム以上に日々アーカイブという言葉は聞くと思います。それは、デジタ

ルアーカイブが一つの大きな要素ですけれども、日々アーカイブという言葉を知っていると思いますが、30年前に日本にアーカイブという言葉はあまりなかった。一般的ではなかった。私が1985年に東京国立近代美術館で仕事を始めたとき、ミュージアムはありましたが、この中のライブラリはほとんどなかった。ましてやアーカイブという言葉は全くなかった。

しかしながら、概念としてのアーカイブというのは、私は1988年に遭遇しました。

88年の2年前、今からおよそ30年前ですね、IFLA、国際図書館連盟の東京大会があって、IFLA東京大会から全てが始まります。どうということかという、IFLA東京大会で日本の美術図書館員は海外のアートライブラリアンと初めて遭遇します。

IFLA東京大会においてセッション、分科会がいろいろあるわけですが、分科会のチェアだった人が、オーストラリアのキャンベラの人で、オーストラリア・ナショナル・ギャラリーのライブラリアンだったのです。その人に、「水谷、シドニーでIFLA大会があるから、来て日本の状況を話せ」と言われました。それで、2年後、つたない英語でペーパーを発表しました。

1988年のIFLAのシドニー大会において、キーノートスピーカー、基調講演をされた人がレムケ（Lemke）先生という女性の先生でした。その人がIFLAのシドニー大会の美術図書館分科会の基調講演においてお話をされたのがアートアーカイブで、「Art Archives :A Common Concern of Archivists, Librarians and Museum Professionals」という講演をされます。すなわち、アートアーカイブというのは、アーキビストにとっても図書館員にとってもミュージアムのプロフェッショナル、学芸員にとってもみんな共通の関心だという発表をされたのです。

私は、このとき初めてアートアーカイブというものを概念として知ることになりました。おそらくアートアーカイブという言葉を知った最初の日本人だと思いますけれども、概念として

のアートアーカイブというのに1988年に遭遇します。

2.2 Art Archives アートアーカイブ その「実体」との遭遇 1990

また、ラッキーでしたけれども、1990年にアメリカ政府からアメリカのミュージアム、あるいはミュージアムの中のライブラリについて視察しないかというお誘いをいただきました。1990年におよそ1カ月半アメリカをずっと回って、その中で当然のことながら訪問するのがニューヨークのMoMA、Museum of Modern Art、ニューヨーク近代美術館です。

ニューヨーク近代美術館には、当然のことながらMoMAのライブラリがあります。そして、MoMAのライブラリの中にはアートアーカイブがあります。

この方はこのときのMoMAのライブラリのディレクター、MoMAの美術図書館の館長さんのクライブ・フィルポット（Phillpot）さんです 写真2。



写真2 Library and Archives, MoMA, NY

この人が手にしているのは何かというと、絵手紙ですね。誰が描いているかというと、ピカソがMoMAの初代館長であるアルフレッド・パーJr.に宛てて出した手紙です。こういうのがあるということ、こういうのが大事であるということを知りました。作品でもなく、ミュージアムのコレクションでもなく、ライブラリの本でもない、これが「アートアーカイブ」であり、

これが大事である、ということを見せてくれました。

2.3 Relationship of Art Archives to Libraries, Museums 1990

以上がアートアーカイブの実体との遭遇ということですが、アメリカに行きましたので、先ほどのIFLAシドニー大会でキーノートスピーチをされたレムケ先生に会いに行きました。レムケ先生はシラキュース大学の先生だったのですが、親切なことに、シラキュース大学で講義に使っていたテキストをくれました。

それは、すばらしいテキストでした。テキスト冒頭において、「Relationship of Art Archives to Libraries, Museums, and other Art Information Centers」というイントロダクションがあったのですが、これは完全にMLA連携です。MLA連携というのは、アーカイブからスタートすると良い、という話を書いてあった。このようなテキストをいただいたりしながら、何となくアートアーカイブというのがあり、それは私の国立近代美術館の中にあるが、誰も認識をしていない。だんだんこういったことをやらないといけなかなと思いつつ、3年ぐらい過ごしました。

2.4 Art Archives アートアーカイブ その「実体」との遭遇 1993

そこに、まさにMLA連携を実体として感ずることができたのが、岸田劉生資料の寄贈受け入れでした。岸田劉生のご遺族から作品、あるいは劉生の蔵書、そして劉生のアーカイブが大量に寄贈されて、3年ぐらいかけて整理をしていきました。そして、「岸田劉生所蔵作品と資料の展示」という展覧会を1996年にしたわけです。

これはどういうことかという、ここに劉生の作品があって、作品にかかわる図書があって、作品にかかわる劉生のアーカイブ、劉生の日記が同じ空間に並べられました 写真3。すなわち、この写真自体がMLAで、ミュージアムのコレクションとしての作品、ミュージアム・ライブラリの資料としての図書とか雑誌、劉生が

残したアーカイブとしての日記といったものが同じ空間に並ぶ。



写真3 劉生のMLA連携 展示風景

これを見ていくと、作品のことが非常によくわかります。作品と本だけでは見えてこなかったことが、その当時の劉生の気持ちとか状況が非常によくわかる。ですので、第三極としてのアーカイブを置くことによって、作品、あるいは作家に対する理解が非常に深まるのです。

これは劉生の10代のときの水彩画ですが、この水彩画を描いていたときの日記があるんですね。その日記には、この絵を描いていたときの感情が、薄暮の海 という作品名をつけて、「汐風松に訪れて錚々として」ということが書いてある。劉生少年がどういう気持ちでこの絵を描いたというのが非常によくわかります。

劉生は多くの日記を残しているので、意外と早い段階で活字化されて本になっています。これは岩波書店から出ている岸田劉生全集のものですが、活字化されている。そうすると、既に3つの画像をお見せしましたが、これはすなわちMの作品と、劉生の直筆の日記と、それが活字化されて本になって、それはライブラリになるわけですから、こういう関係がつけられているということが見えてくる

図1。

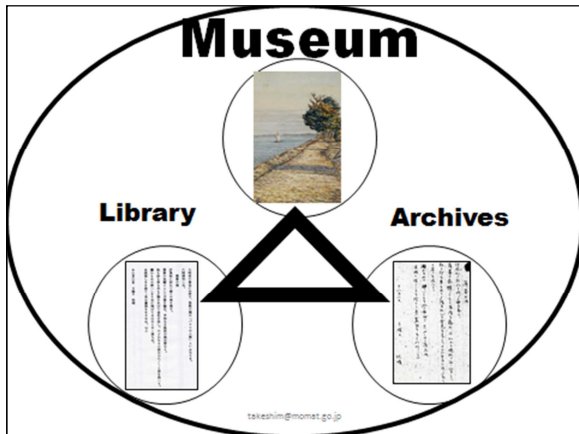


図1 劉生《薄暮の海》をめぐるMLAの内なるトライアングル

レムケさんが「Art Archives :A Common Concern」と言っていたのは、多分こういう連携のことだなと見直すと、たくさんの連携が見て取れる。

例えばこれは東京国立近代美術館にあります劉生の娘の麗子さんの5歳の像です。これはミュージアムのコレクション、作品ですね。幸いなことに、5歳のときの写真が残っている。これはフォトアーカイブですね。麗子さんは、大人になると『父 岸田劉生』という本を書きます。この中の文章を見ていくと、5歳の像が描かれたとき、麗子さんがどういう気持ちでポーズをしていたのかということがいろいろ書かれている。すなわち、これはこういう連携になるだろうということですね 図2。



図2 劉生《麗子五歳之像》をめぐるMLAの内なるトライアングル

ですので、もう一度見直すと、MLA連携は

至るところにあります。今までミュージアムのコレクション、ミュージアム・ライブラリの本の2つだけで考えていましたけれども、第三極としてのアーカイブを入れることによって、この存在を発見することによって、この作品、あるいは岸田劉生と人間について非常にさまざまなことがわかる。

私たちは、寄贈された資料を全て整理して、目録をつくりました。『東京国立近代美術館所蔵作品目録 岸田劉生作品と資料』という目録を出し、*Catalogue of Collections, The National Museum of Modern Art, Tokyo Ryusei Kishida Works and Archives*という英語名をつけたのですが、これは日本でアーカイブという言葉で所蔵品目録をつくった最初になります。

3 MLA連携の起源(3) 2つのMLA連携のかたち

3.1 2つのMLA連携を描く

私たちは、岸田劉生の資料を受け入れて、展覧会をして、目録をつくるプロセスの中で、MLA連携を発見したわけですね。そういったことを、先ほど言いましたように、ミュージアムのライブラリアンたちといろいろな話をしていきました。

そうすると、MLA連携というのは2つの連携の形があるということが明らかになりました。どういうことかということ、岸田劉生の資料、作品をめぐる連携というのは、東京国立近代美術館という館の中にある連携であります。すなわち、東京国立近代美術館という1つの屋根のもとにミュージアムとライブラリとアーカイブがあるというトライアングルの構造。もう一方で、例えば国立国会図書館のサーチを思い出していただきたいのですが、あれは国立国会図書館と国立公文書館と東京国立近代美術館が連携する。そうすると、MLA連携の1つの形は、1つの館の中にある。すなわち内なる連携である。それから、もう一つの形は、組織を超えて連携をする。すなわち外なる連携があるのではないか

という話をしてきました 図3。



図3 2つのMLA連携(水谷)

3.2 M L A under same roof: An individual institution with all three types of organizations/M L A in the wild:

Individual independent institutions

それから、私がそういった考えをまとめたタイミングが1993年、それから4年ぐらいかけてですね。そういう考え方を『現代の図書館』に書いたことがある¹のですが、全く同じ考え方をアメリカの人も持っていました。

今はO C L Cに吸収合併されていますが、その当時アメリカにR L G、Research Library Groupという組織があり、R L GとO C L Cが競争していたのです。今、R L Gはなくなり、O C L Cに吸収されましたが、当時R L Gのバイスプレジデントであったミハルコ(Michalko)さんが、慶應義塾大学の招聘でよく日本に来ていましたね。



図4 2つのMLA連携(ミハルコ)

このときに、先ほど言いましたM L A連携の2つの形を、このような言葉で表現したのです 図4。とてもうまいですね。

一つは、M L A under same roof、一つの屋根の中に内なる連携がM L Aであるということです。An individual institution with all three types of organizationsというのは、内なる連携ですね。

それからもう一つは、先ほど言いましたように、国立国会図書館と国立公文書館と国立近代美術館が連携するという外なる連携は、M L A in the wildという言い方をされていて、ミハルコさんと話して、全く同じことを考えているということで合意したのですけれども、そういう日本で私たちが特にアート・ドキュメンテーション学会において模索してきたことと同じことが、同じタイミングでアメリカ、ヨーロッパでも進んでいるということが分かりました。

4 M L A連携の展開 (1) M L A連携の広まり

4.1 M L A連携を世に問う 1994

次は、展開に入っていきます。こういったM L A連携の考え方をいろいろな人と議論していったのが一つの起源だとするならば、その考え方が自然と広まってきて、例えば最初にM L A連携を世に問う作業をしました。それが1994年です。

もう20年も前になってしまうのですが、国立国会図書館において、アート・ドキュメンテーション学会が1989年に誕生したので、5周年の記念のフォーラムをやりました。そのときに、「ミュージアム・ライブラリ・アーカイヴをつなぐもの - アート・ドキュメンテーションからの模索と展望 - 」というシンポジウムを開いて、これが日本で最初、あるいは世界的にも早い段階でM L Aの考え方を世に問うたシンポジウムでした。

ここに3人M、L、Aと並んでいます 写真4。



写真4 MLA連携を世に問う（1994 於、国立国会図書館）

誰かという、この方は現在大原美術館の館長になっている、当時は国立西洋美術館の館長だった高階秀爾先生です。Mの代表ですね。それから、Lの代表は誰かという、慶應義塾大学の当時の図書館・情報学科の教授であった上田修一先生です。それから、こちらにいらっしゃるのがアーカイブ代表ということで、安澤秀一先生という文書館の研究のパイオニアだった人ですけれども、このお三方を招いて、こういうMLA連携のトライアングルの図を描いたことがあります。

4.2 あらためて問うMLA連携 2009

2009年は、アート・ドキュメンテーション学会が20周年を迎えたときなので、もう一度MLA連携について改めて問うというシンポジウムを東京国立博物館において行いました 写真5。



写真5 MLA連携を世に問う（2009 於、東京国立博物館）

このときは、国立国会図書館の館長の長尾先

生と、国立公文書館の館長である高山正也先生ですね。高山先生は、この当時国立公文書館の館長をされていましたが、もともとは慶應義塾大学の図書館・情報学科の先生です。それから、真ん中にいらっしゃるのが京都国立博物館の佐々木館長で、国立文化財機構の理事長であります。ですので、このお三方により、MLA連携の可能性についてお話をいただいたというのがこの写真になります。そのようにあらためてMLA連携を世に問うたわけです。

4.3 MLAをめぐる多様な議論と展開 2010-2011

今駆け足で一連のお話をしてきましたが、1989年にアート・ドキュメンテーション研究会、現学会ができて、岸田劉生の資料を受け入れて、国立国会図書館でMLA連携のシンポジウムを行って、2009年にこういう形で2回目の「MLA連携の現状、課題、そして将来」というシンポジウムを開いた。

このときから、MLA連携についての本が立て続けに出ます。「MLA連携をめぐる多様な議論と展開」ということで、これはアート・ドキュメンテーション学会がやったシンポジウムの報告をまとめた本です 写真6。



写真6 アート・ドキュメンテーション学会20周年刊行物

それから、図書館の文脈からも、『図書館・博物館・文書館の連携』という本が出ます。これは、日本図書館情報学会が出した本です。

あるいは、知的資源イニシアティブが『デジ

タル文化資源の活用 地域の記憶とアーカイブ』という本を出すんですけども、この中身は、日本のMLA連携の方向性を探るラウンドテーブルの報告書になっています。これも2011年ですね。

それからもう一つ、東京大学においても、根本先生、吉見先生をはじめとして『つながる図書館・博物館・文書館 デジタル時代の知の基盤づくりへ』という本を出す。

そうすると、私たちアート・ドキュメンテーション学会が東京国立博物館でMLA連携についてのシンポジウムを行ったのが2009年ですけども、その後2010年、2011年で実に4冊のMLA連携に関する参考図書が出ているということで、2010年、2011年というのは日本におけるMLA連携の議論が非常に広範囲に進んだ時代だったと思います。

5 MLA連携の展開 (2) MLA連携の基礎課題

5.1 なぜMLA連携はM-L-Aの共通課題として捉えられるのか/捉えられたのか

そして今、2015年という現時点においては、おそらくは新たなミュージアム像、新たなライブラリ像、新たなアーカイブ像を語るときに、連携の要素というのはある前提になっているのか、いずれの場合においても共通に抱えている課題であるということまで、MLA連携の考え方というのは広まっていると言っているのではないかと私は思います。

では、具体的にMLA連携を展開するときの基礎的な課題というものを整理したいと思います。

ミュージアムにコレクションがある、ライブラリにコレクションがある、アーカイブにコレクションがある。なぜそれぞれのコレクションがそれぞれの館の中にあるのか。言葉を変えて言うならば、ミュージアムのコレクションとライブラリのコレクションとアーカイブのコレクションはどういうところが違って、どうい

うところが同じなのかということから考えや認識を掘り下げないといけないという事態になっていると思うのです。

皆さんは図書館の方ですが、図書館の中にあるものも、特に郷土資料などはMLAそれぞれのタイプがあると思います。そうすると、Mのコレクション、Lのコレクション、Aのコレクションというのは何が違うのか。あるいは、違いは皆さん感じていると思いますが、その違いをどうやって言い表すのでしょうか。MのコレクションとLのコレクションは何が違いますか。今日の博物館、美術館、図書館、文書館において、MのコレクションとLのコレクションとAのコレクションは何が違って、何が同じなのか。それを考えないと、MLA連携は展開しないということを私はかなり強く考えさせられました。

ということで、この基礎課題について整理していきます。それを踏まえておくと、どうして21世紀になってMLA連携というのがMでもLでもAでも共通の課題として今捉えられるのか、あるいは捉えられたのかというのが、少しだけかもしれませんが、整理されるのではないかと思います。

背景には、MLA連携の可能性を担保するものとしてのデジタルアーカイブとインターネット空間の共有ということがあるのは事実です。MLA連携というのは、別にコンピューターとネットワークの問題だけではないですが、その連携を一つの機能なり成果として如実に目に見える形で感じられるのは、やはりデジタルアーカイブとインターネットです。

デジタルアーカイブとインターネットがどうしてMLA連携と絡むのかということ、理論的にというか、概念を整理してみました。その概念の整理について、実は4年前にアーカイブズ学会で私は「デジタルアーカイブとMLA連携：原理の整理の試みとして」¹¹というプレゼンテーションをしたことがあって、アーカイブズ学会の学会誌に報告が載っていますので、御覧いただくと良いかなと思います。

重要なのはこれです。“いつやったか。” 2011

年4月23日です。2011年の3.11があって、MLAのそれぞれの学会のトップバッターの学会が日本アーカイブズ学会の総会、年次大会でした。それが学習院大学で開かれました。震災から1カ月ちょっとたったときに、みんなMLA連携は必要だという意識が非常に強かったです。なぜ震災がMLA連携を引き起こすかについては、後ほど今日の最後にお話をしたいと思います。

5.2 デジタルアーカイブとMLA連携:原理の整理の試みとして3つの基本的な見方(概念)

では、原理の整理はこれを見ていただきたいと思います 図5。三題ばなしではありませんけれども、まずメディアというのがあります。それから、メタデータというのがあります。それから、コンテンツとキャリアとの関係では、不可分性とか代替可能性、BindingnessとかSubstitutabilityという英語が出てきますけれども、とにかく3つを整理したいのです。この3つを整理しておく、意外と先ほど皆さんに問いかけたMのコレクションとLのコレクションとAのコレクションの差異と同質というのが見えてきます。

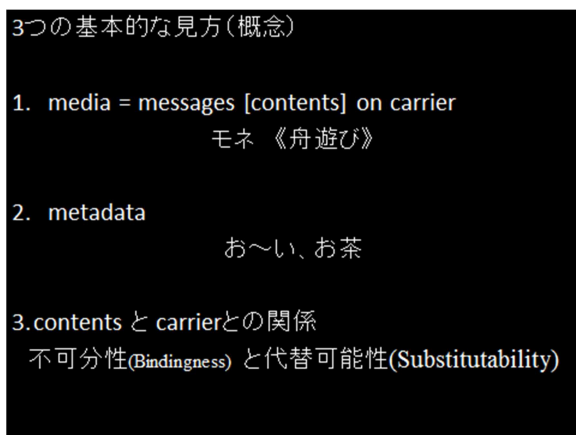


図5 MLA連携の原理3つ

では、最初に、メディアはmessages on carrierであるというお話をしたいと思います。これはどういうことかという、これは国立西洋美術館にあるモネの作品です。素晴らしい作品です。この作品は 舟遊び、英語の題は《On

the Boat》です。私たち美術館の人間は、この作品の特性を記述するときに、この作品は油彩・麻布である、油彩で描かれている、キャンバスに油絵の具で描かれていると言いかたをします。それはどういうことかという、oil on canvas、あるいはink on paper、墨、和紙なんていうのは、ink on Japanese paperという言い方をします。onですね。このonが重要なんです 図6。



図6 モネ《舟遊び》はoil on canvas

キャンバスというのは油絵の具を支えているものである、すなわち支持体という言い方を私たちはします。ですので、油彩・麻布というのは、油彩という技法あるいは素材が麻布、キャンバスの上に乗っている。だから、キャンバスはオイルを支えているという言い方をします。あるいは、オイルを運んでいる運载体、キャリアであるという考え方をします。

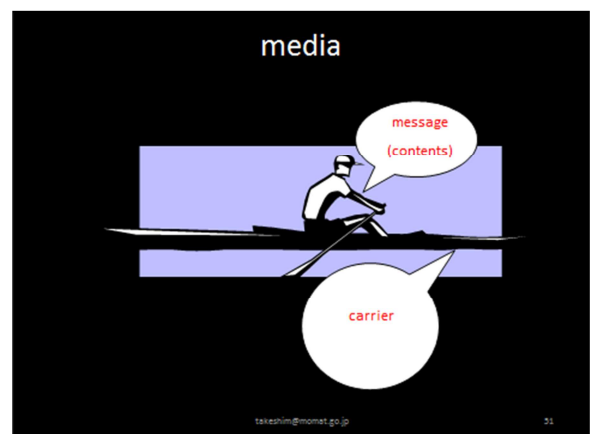


図7 人(contents)は舟(carrier)に運ばれて

oil on canvasというのは、キャンバスという支持体の上に油絵の具が乗っている。先ほど言いましたように、メディアはmessagesあるいはcontents on carrierという考え方は、まさにoil on canvasなんですね 図7。このメディアの特性を頭に入れておいてください。

もう一つは、メタデータです。図書館にいらっしゃる皆さんは、昔は書誌データとか目録とかいろいろな言い方をしていましたけれども、今は多くの場合メタデータという言い方をしたいと思います。メタデータというのは何なのかといったときに、いろいろな議論がありますが、ある図書館情報大学の先生は、とてもうまいことを言いました。

今日お茶を持ってくればよかったのですが。どうということかという、学生にメタデータを説明するときに、図書館情報大学の先生が表現するメタデータの例を使います 図8。

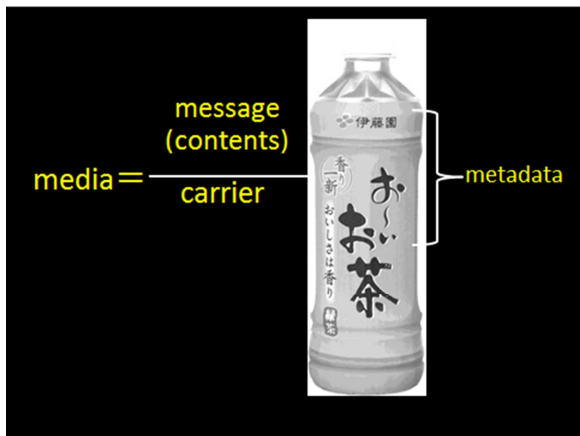


図8 「metadataはペットボトルのラベル」という比喻

私たちは、毎日のようにコンビニで、あるいは自動販売機で100円入れたり150円入れたりして、こういったペットボトルのお茶を買って、ゴロンと出てきたお茶を何の疑問もなく飲んでいます。もしもお茶のペットボトルこのラベルがなく、自動販売機からゴロンと出てきたら、お茶を皆さん飲みますか。100円、あるいは150円入れて出てきたペットボトルが、ラベルのないものだったとすると、私は少なくとも飲まないです。私たちは、100円なり150円を入れて自

動販売機から出てきたお茶を何の疑問もなく飲むのは、このラベルがあるからです。

図書館情報大学の先生は、メタデータというのはペットボトルのラベルであるという言い方をします。確かにそうです。コンテンツ、中身は変わっていません。すなわち、ボトルというのは水なりお茶を運ぶキャリアで、中身がコンテンツ。でも、それだけでは私たちはそのコンテンツを享受はしない。なぜ享受するかというと、ラベルがあるからだということで、これがメタデータということです。

メタデータというのは、例えば考古遺物でもそうですね。考古遺物にはさまざまな形態があって、我々の想像を超えるようなものがありますけれども、それが博物館に置かれて、私たちが享受するのは、考古遺物に付与されたメタデータがあるからであると考えます。すなわちどうということかという、この構図です。キャリアの上にコンテンツがある。oil on canvasである。キャンバスがキャリアである。その上に、コンテンツ、オイルが乗っていると考える。メディアはキャリアの上にコンテンツを乗せている。そして、ラベルがメタデータであると考えのです。「おーいお茶」を持ってくればよかったですね。忘れてしまいました。

もう一つの第3の課題というか、第3の概念を整理してみましょう。MとLとAの差異を考えるとときの一つの尺度が不可分性です 図9。

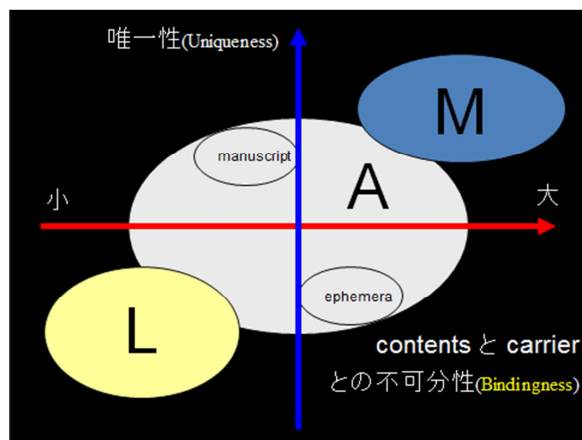


図9 「CとCの不可分性 (Bindingness)」という尺度

これはどういうことかという、縦軸に唯一性 (Uniqueness) をとります。ミュージアムのものは極めて唯一性が高い、ユニークなものです。それに対してライブラリのものは、例外は当然ありますが、基本的にグーテンベルク以来プリントド・マターですから唯一性は低い。これはわかりますね。ミュージアムのものは世界に1つしかない。モネの真作の「舟遊び」は1点しかない。ですから、ミュージアムのコレクションは唯一性が非常に高い。それに対して、ライブラリの資料というのはプリントド・マターだから唯一性が低い。

じゃあ、横軸は何かというと、コンテンツとキャリアとの不可分性ということです。モネの作品について、オイルはキャンバスの上に存在していると言いましたけれども、オイルがコンテンツでキャンバスがキャリアだとすると、この絵においてはコンテンツとキャリアはぴたっとくっついている。バインドされている。バインドの圧着度というかくっつきぐあいというのは、非常に強いと考えられます。ですので、ミュージアムのものというのは、先ほどのキャリアとコンテンツの関係を考えるならば、不可分性が非常に高い。oil on canvasのオイルとキャンバスは分かち難く存在している。

それに対して、ライブラリの資料というのは、コンテンツ、テキストと言ってもいいんですけども、テキストとキャリアというのは容易に離れていく。あるいは、容易に離れていくというよりも、容易にキャリアはその姿を変えていく。すなわち、代替しているということです。同じことを言っているのが、次の図です 図10。

すなわち、横軸に不可分性をとると、Mはこちらになります。横軸にキャリアの代替可能性を立てると、ライブラリのキャリアは容易に代替していくということになります。

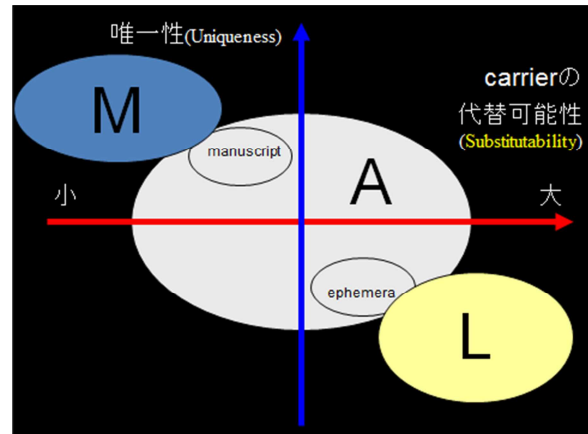


図10 「Cの代替可能性 (Substitutability)」という尺度

これは、何か変なことを言っているように思われたかもしれませんが、ミュージアムのキャリアというのは変わりません。変わったら、それは本物ではなくなりますから。例えばモネの「舟遊び」というのは、同じイメージがもし複製されたとするならば、オリジナルと複製との間の価値の相違というのは非常に大きいですね。複製というのはほとんど価値がない。

それに対して、ライブラリの資料というのは、容易にキャリアが代替していきますよね。例えば複製する、マイクロフィルムになる、スキャンしてPDFになる、JPEGになる、どんどんキャリアは変わっていきます。このため、キャリアは代替可能性が非常に高いと考えられます。ということはどういうことかという、ライブラリの資料はキャリアが変わっても、そのコンテンツ自体、あるいはそのものの自体の価値の減少はないということになる。

今2つの図をお見せしましたけれども、この違いというのがMLAのコレクションの性質の違いであると考えられることができるわけです。これがMLAの差異についての概念の定義の試みです。

それがどうしてデジタルアーカイブ、インターネットにつながって、MLA連携につながるかということをお話したいと思います。どういうことかという、MLAというのは、今はそうでもありませんが、30年前はとて館の壁が強かった。人も資料もそれぞ

れの館の中であって、一向に出ていこうとしなかった。ミュージアムの人がライブラリの人と会って、1つの同じ仕事をするということがあまりなかった。あるいは、ライブラリの人がミュージアムの方に出向いて、同じような課題に取り組むということは全くなかった。非常に壁が堅固なものであった。ですので、人も物も壁から出ていかない。それで済む。

でも、MLAのコレクションに相当するものというのは、館の中だけにあるのではないですよ。MとかLとかAに収蔵されていないものもたくさんあります。たまたまMの中にある、たまたま図書館の中にある、Aの中にあるだけであって、相当する文化遺産というか文化財というのは、いろいろなところに沢山あります。

ですので、研究者は非常に広く見渡し、研究者が必要なものであれば、Mにも行くしLにも行くしAにも行く、あるいはいずれにも存在しないものを探します。でも、残念ながら、Mの人、あるいはMのもの、Lの人、Lの資料は館から出ていかなかった 図11。

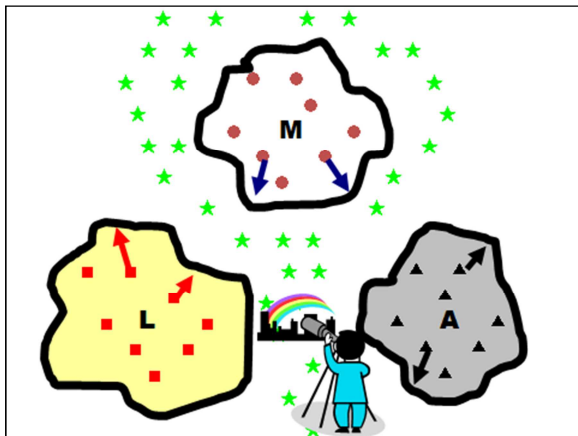


図11 館の壁の中にとどまるMLA

しかし、それがインターネット空間に出ていくということが行われます。デジタルアーカイブがどうしてインターネットに出ていって、MLA連携につながっていくかという話をしていきたいと思います。そのときに、メタデータの問題ともう一つ、変な言葉ですけども、デジタル化物のセットの構造というのをお話ししたい。

5.3 MLAのデジタル化に伴う「メタデータとデジタル化物(オリジナルの写像)のセット」の構造

デジタル化物というのは、オリジナルのものをさまざまな形で写していくデジタルデータであると考えてください。すなわち、オリジナルの写像であると考えていただければいいと思います。

どういうことかということ、これは現代美術の作品ですが、ロン・ミュエクの Big Baby#3 という作品です。彫刻と言っていいのか分かりませんが、立体物ですが、現代美術の作品があるとします。この現代美術の作品をどうやって私たちはデジタルアーカイブしているのかということ整理してみたいと思います。これがオリジナルですね。当たり前のことですが、オリジナルの作品はインターネット空間に存在することはできません。

では、どうしてこの作品はインターネットに存在しているかのように見えるかというと、デジタルをつくるからですね。すなわち、オリジナルの写像としてのデジタルイメージをつくるからです。3次元の現物はインターネット空間には存在しないけれども、デジタルアーカイブとしてそれをインターネットに公開すると、オリジナルの写像としてのデジタル化物、すなわちJPEGや、高精細のいろいろな画像であるわけですが、それがインターネット空間に置かれる、あるいはインターネット空間で流通することになります。

ただ、これだけでは、私たちはデジタルアーカイブをインターネット空間に置くことにはなりません。必ずデジタル化物とメタデータがセットになっていないといけない。インターネットで私たちが現代美術の作品をあたかも鑑賞し、享受する背景には、オリジナルの写像、すなわちデジタルイメージファイルをつくって、そのファイルにメタデータを付与することによって、デジタルアーカイブは成立して、それがインターネット空間に置かれるということです。つまり、今インターネットでデジタルアーカイブと

いったものを使うときには、必ずその背景には写像としてのデジタル化物があるとともに、そのデジタル化物に対してメタデータが付与されているということです 図12。

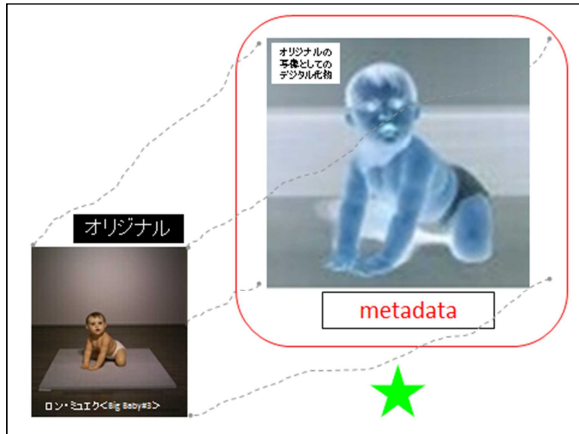


図12 = オリジナルの写像とメタデータのセット

この星印は「デジタル化物+メタデータ」のセットを表しています。このようにインターネット空間に出てきます。オリジナルの写像をつくり、写像とメタデータをセットにすることによって、セットがこちらの空間に置かれることによって、今まで館に閉じていたものがインターネット空間に出ていくとすると、研究者は今までLの中にあったもの、Mの中にあったもの、Aの中にあったものを所蔵はどこであれ等しく把握できるようになるだろうというのが、MLA連携とデジタルアーカイブ及びインターネットの関係です 図13。

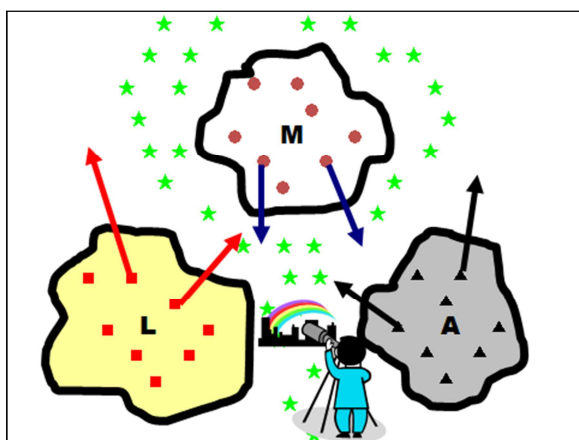


図13 館の壁を越えるMLAの

この人がこの作品を探しています。うる覚え

で、この作品は何か見たことがある、実際のものを見たいと考えたとします。でも、この人は直接何の情報もなければ、この作品にアクセスすることができません。

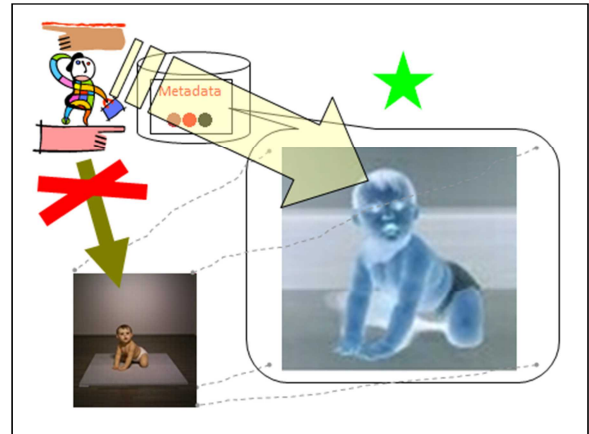


図14 デジタルアーカイブからオリジナルへ辿り着く

あるモノが世の中にはあるけれど、どこにあるかわからないといったとき、直接アクセスできないとき、オリジナルの写像としてのデジタル化物とメタデータがセットになっているものがインターネット空間に置かれると、この人はメタデータを検索することによって、デジタル化物にアクセスすることができる 図14。そして、そのデジタル化物とメタデータを読み解くことによって、オリジナルにつながる可能性を得るということです。

5.4 「オリジナルと写像との関係はMLAそれぞれに特性があり、その特性を捉える事がMLA連携とデジタルアーカイブにとって決定的に重要である。」

今までお話ししてきた、オリジナルがあり、写像としてのデジタル化物があり、メタデータとがセットされて、インターネット空間に置かれるという構造は、今日Mのデジタルアーカイブにおいても、Lのデジタルアーカイブにおいても、Aのデジタルアーカイブにおいても同じ構造で行われています。

皆さんもそうですよね。図書館のデジタル化を考えたときに、例えば貴重資料があって、あるいは地図があって、地図そのものはインター

ネット空間に置けませんから、写像、デジタル化物をつくるわけですね。それだけではだめだから、その資料についてのメタデータをセットにして公開する。利用者は、オリジナルには行けないから、メタデータを介して写像を把握して、オリジナルへアクセスする可能性を探るということになります。

そうすると、今までお話ししてきたオリジナルと写像とメタデータの構造は、Mのデジタルアーカイブ、Lのデジタルアーカイブ、Aのデジタルアーカイブにおいて同じ構造をつくっている。ですので、インターネット空間において、もともとMのものもLのものもAのものも同じように把握ができる、等しく連携をするということなのです。

ただし、ここには大きな落とし穴があります。ここまでは一緒です。何が違うかということ、オリジナルと写像との関係はMLAそれぞれに特性がある。特性は何かということ、十字の絵を思い出していただきたいのですが、Bindingness、キャリアとコンテンツのバインドの強さ及びキャリアの代替可能性がMとLとAでは異なるという特性を捉えることが、MLA連携とデジタルアーカイブにとって決定的に重要である 図9 図10。

すなわちどういうことかということ、唯一性の高いMのものをデジタルアーカイブして、インターネット空間に置いて、興味を持っている人がその写像にたどり着いたとします。そうすると、オリジナルのものと写像においては、見た目は一緒だけれども、価値は全く異なる。写像は、価値においては全く意味がない。でも、私たちはモネの「舟遊び」の写像を見ることを喜ぶ。

MのオリジナルとMの写像との間においては、価値に大きな違いがあるのに対して、ライブラリの資料はオリジナルはプリンテッド・マターですけれども、プリンテッド・マターのオリジナルの本と、写像の中にあるコンテンツ、すなわちテキストの間に価値の低減はないと考えられるのです。この関係というのはよく考え

ておく必要があるでしょう。

5.5 M-L-Aの多様なコンテンツを記述/表象するメタデータを一元化する試み

今、いろいろなところでMLA連携を行うための試みが進んでいます。構造的には、オリジナルがあって、写像があって、メタデータがあって、そしてその構造でインターネット空間に置かれるということですがけれども、一番大変なのは、あるいは難しいのはここですね。メタデータを一元化する方法が一番難しい。この試みは、皆さんもご存じのように、ダブリンコアということで壁を乗り越えようとしています。

国立国会図書館でも、サーチにおいてメタデータを一元化する試みが既に動いています。例えば先日も国立国会図書館で日本版ヨーロッパーナをつくらうというシンポジウムが開かれました。今日世界で先端的なMLA連携のシステムのシステムとしてあるのが、ヨーロッパのヨーロッパーナ(Europeana)というものです。ここには、ヨーロッパのECのミュージアムのもの、ライブラリのもの、アーカイブのものが写像とメタデータのセットになって大量に置いて、検索可能になっている。

なぜ検索可能になっているかというと、メタデータが一元化されているからです。あるいは、国立国会図書館も国立国会図書館ダブリンコアメタデータ記述、DC-NDLというのを行っているがゆえに、サーチというのが現実になるということですね。

今日もいらっしゃっていると思いますけれども、秋田県立図書館が日本の県立図書館においてMLA連携の一つのスタイルを築かれているということは、皆さんもご存じだと思います。県立図書館とあきた文学資料館、秋田県立近代美術館、秋田県立博物館、秋田県立公文書館、埋蔵文化財センターといったもののデジタルアーカイブがシステムにおいて一元的に検索できるようになっているというのは、背景において、図書館の方がメタデータを一元化する試みをされたからです。

6 MLA連携の展開 (3) 連携の要としての公立図書館の可能性

6.1 さて、MLA連携のLにおける先導性と効用について Lの優位を確認すると...

では、時間も迫ってきましたので、連携の要として公立図書館の可能性というのを考えてみたいと思います。どういうことかということ、秋田県立図書館が行われたように、MLA連携を推進する非常に可能性のあるのは図書館だと私は思います。どうしてかということ、MLA連携のLにおける先導性と効用について考えてみたいと思います。

Mの人間がこれを言うのは寂しいところがありますが、MLAの中において連携を先導するのはライブラリだと思います。どうしてか。1つは、地域文化資源のポータルになりやすいということですね。ミュージアム、アーカイブよりもライブラリのほうが地域文化資源のポータルになる可能性は高い。

それから、利用者が能動的である。どうしてもミュージアムに来る人は受動型です。鑑賞する。ミュージアムのコレクションを活用することとはなかなか難しく、能動的にミュージアムに関与するというよりも、受動的で、それに対して、図書館の利用者は非常に能動的、アクティブですよね。ですから、カウンターにいろいろなリクエストをして、ニーズをぶつけていく。これは、MとかAに比べると、可能性を開くタイプの利用者であると思います。

それから、M、Aに比べるとライブラリのほうが伝統的に、あるいは潜在的にレファレンスの力が強いということですね。

それから、最もMと違うのは、「なによりも」と書きましたけれども、図書館の中にあるコレクション、蔵書の情報の開示公開、すなわちOPACが常識である 図15。これは、図書館の人間は当たり前だと思いますよね。自分のところにある蔵書情報を公開、開示するためのOPACを持っていない公共図書館はない。しかしながら、ミュージアムのコレクションの情報を

開示しているところは極めて少ないです。自分のところのコレクションをデジタルアーカイブにして、開示しているミュージアムというのは、日本はとても少ない。

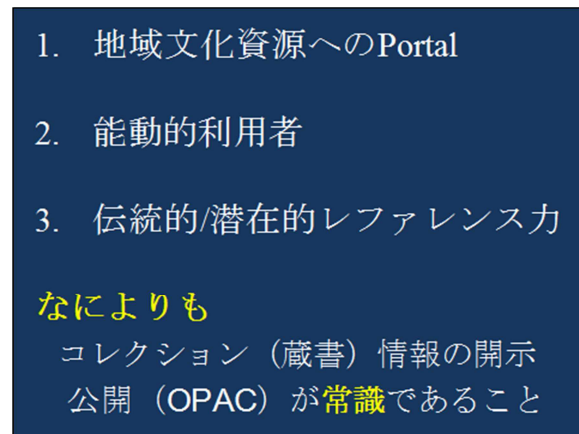


図15 MLA連携におけるLの優位

6.2 全国美術館会議学芸員研修会2015から

美術館はホームページでどのような作品情報を発信すべきか、学芸員は美術情報資料をどこで入手するのかというテーマの学芸員研修会というものを、今年3月に全国美術館会議の主催で行いました。鴨木さんという東京富士美術館の方が、日本の美術館のホームページにおいて、所蔵のコレクション情報がどのように発信されているかという実態調査を2013年に行って、その報告を出しています。ⁱⁱⁱ

これを見ると、ホームページにコレクションのページがない館、美術館が持っているコレクションについての情報を発信していないホームページが33%だった。図書館の蔵書の情報を発信していない図書館はないですね。それに対して、美術館はこういう状態です。作品のデータベースを公開しているのが16%。ということはどういうことかということ、33%の美術館は自分のコレクションの情報をホームページで発信していないし、51%はコレクションの情報を発信しているけれども、それはごく一部である。データベースとして検索可能にしている、すなわち図書館のOPACのようなものが整備されているミュージアムは16%にしかすぎないという現実があります。

6.3 東京大学司書・学芸員課程でのレポート 2015 から

あるいは、例えば今、私は、東京大学で司書・学芸員資格課程で図書館・博物館情報メディア論を担当していますが、その学生さんに課題を出す。どういう課題を出すかという、大きな国立博物館とか国立美術館ではなくて、あなたが住んでいるところの最も身近なコミュニティの博物館のコレクション情報にアクセスできるかを調べてきなさい、という課題です。

そうすると、例えばこんなレポートが出てきます。これは東京大学の建築の修士の院生が書いてきたレポートです。特定の美術館の名前は出しませんが、どこかの区立の何とか美術館です。そうすると、全所蔵作品の紙の目録は公開されていなかった。『美術館だより』もホームページに一部出ているけれども、最新号しか出なかった。その美術館に行って、所蔵作品の目録はありますかと言うと、全部はありませんが、人気のある作品は載っている目録はあります。では、全所蔵作品の目録は公開していないんですかと聞くと、公開していませんと言うんですね。また、ホームページに最新号の『美術館だより』がありましたが、バックナンバーはありますか。ここにファイリングしたものがありませんけれども、一般公開していません。どこかの図書館に『美術館だより』が置いてありますか。ここにあるだけです。あるいは、よく美術館、博物館は年報に新たに収蔵した作品を載せるので、年報はありますか。年報を出せるような美術館ではありません。企画展の画集が販売されていますが、コレクションの画集はありませんかと言うと、税金でもうけてはいけないというので、区の収入になるのは入館料と貸しギャラリーの収入だけで、そういったものをつくっていませんというふうです。

この学生はかなり偉いことに、区立美術館なので区役所に行って、区立何とか美術館の所蔵作品の目録はありますかと聞くと、持っています。公開はしていません、美術館には聞いてみましたかと言われる。それから、『美術館だ

より』のバックナンバーは持っていますか。最近の何号か分は持っていますけれども、昔のものは持っていません。区の図書館にバックナンバーがあったりしませんか。ないと思います。こういう状況だと、この美術館のコレクションの情報というのはほとんどアクセスできないのですね。

これを変えていくのがミュージアムの急務であるという意味において、MLA連携を先導する可能性は公立図書館にある。ここですね、ここが全く違う。今美術館、博物館は、図書館のようにはいかないけれども、もう少しコレクションの情報を開示する仕事をしようという機運が高まっています。その一つのモデルとなるのが、図書館のOPACであると言われています。

6.4 MLA連携 図書館でまずできること

そう考えていくと、皆さんに改めてMLA連携において図書館の先導性を発揮していただきたいと思います。まず、図書館で何ができるかというのを考えていただきたい。皆さんは、館長さんも含めてですけれども、県立図書館とか区の図書館の中核を担う方だと思いますが、例えば県立図書館の開架の書架にその県の美術館の刊行物がまとめて置かれている館の方は手を挙げてください。お一人、お二人、三人。

MLA連携というのは、デジタルアーカイブとかインターネットの問題であるとともに、速やかなる連携という意味では、すぐに図書館にできることは、その県、市の展覧会のカタログや年報や所蔵品目録やニュースをまとめて開架に置いていただくことです。そうすると、図書館の利用者がミュージアムに導かれる可能性がぐっと高くなります。

今日私が最後にお話ししたかったのは、MLA連携というのは、何もデジタルアーカイブとかインターネット、あるいはメタデータの問題だけではないということです。まずは図書館の中に同じコミュニティのミュージアムの刊行物をまとめて置く棚を開架の書架に設けていただ

きたい。

冒頭、ミュージアムの中にライブラリができている、でき始めている、それなりにいいライブラリがミュージアムの中に誕生しつつあるというお話をしましたが、ミュージアムの中に公開のライブラリをつくるというのは、スペースも人員も大変難しいことです。

ミュージアムというのは展覧会カタログも所蔵品目録も年報も季報もニュースもたくさんの印刷物、パブリケーションをつくっています。それにアクセスできる環境をミュージアムの中に持つのはとても大変なので、同じコミュニティのパブリック・ライブラリである公立図書館に寄贈して、それを受け入れていただく皆さんがこのような棚をつくっていただくと、MLA連携はぐんと進捗いたします。ぜひお願いしたいと思います。このMLA連携は、外なる連携の典型的な形になると思います。

終わりに - M L A 連携の新たな起源 2011.3.11

さて、終わりに、MLA連携の新たな起源としての観点についてのお話を若干したいと思います。MLA連携でMのコレクション、Lのコレクション、Aのコレクションにいろいろな差異があるというお話をしました。不可分性とか代替可能性とか、BindingnessとかSubstitutabilityとか言いましたけれども、MLAは同じような仕事をしています。

一貫するタスクは何か。それは、集めること、Collection、集まってきたものを同定すること、Identification、それから、それを記述すること、メタデータをつくること、そして、それを検索可能にするということ、検索可能にした状態をオープン、パブリックにすること、アクセシビリティを高めることという5つのプロセスですね。集積、同定、記述、検索、公開というのは、MにおいてもLにおいてもAにおいても、いずれにおいても行っています 図16。

MLAに一貫するタスク	
集積	Collection
同定	Identification
記述	Description
検索	IR / Search
公開	Open / Public / Accessibility

図16 MLAに一貫する5つのタスク=ドキュメンテーション

ですから、この5つのプロセスというのは、一貫したタスクである。ですから、ミュージアムの人間もライブラリの人間もアーカイブの人間も、同じ技能というかテクニックというか、あるいは考え方というか、タスクを担っていると考えられます。

私たちは、こういった一連の過程を、ドキュメンテーションと言います。ですから、ドキュメンテーションにはミュージアムのドキュメンテーションもあれば、ライブラリのドキュメンテーションもあれば、アーカイブのドキュメンテーションもあるわけですが、ここに書いてある5つのプロセスが1つでも抜けてしまうと、MLAは機能しません。そうですね。集まってこなかったら、そしてそれを同定しなかったら、それを記述しなかったら、検索可能にできなかったら、そしてさらに公開しなかったら、ミュージアムはミュージアムたり得ない、ライブラリはライブラリたり得ない、アーカイブはアーカイブたり得ないので、この一連のプロセスがドキュメンテーションである。

こういうことを3.11の陸前高田の博物館の方が明確に示してくれました。3.11、東日本大震災のとき、陸前高田は壊滅的な被害を受けました。図書館も消えた。博物館も消えた。海の博物館も消えた。ほとんど消えました。私は、半年後ぐらいにそこを訪ねましたが、本当に大変な状況を目の当たりにしました。そして、多くのミュージアムの人、ライブラリの人がお亡

くなりになりましたよね。

そのとき、私たちに教えてくれたのはこれです 写真7。陸前高田の博物館の資料が全て海水で流されましたけれども、それを回収して、小学校の体育館に並べてありました。これは2011年11月18日に行ったときに写真を撮影させていただいたものですが、この博物館の資料が辛うじて生き延びている。

なぜ生き延びているかという、ラミネートしたタグがあるからです。これはノリアミです。昭和55年1月21日に受け入れました。熊谷鳳五郎さんが寄贈しました。これは民俗である。分類は2360 65 1293である。これはメタデータです。メタデータをつくってくれた。すなわち、集まったものを同定して、記述してくれた。しかもラミネートで。これを作業した方はお亡くなりになりました。



写真7 2011.3.11「あなたのタグがあったから」
陸前高田の博物館

朝日新聞が6月21日に「あなたのタグがあったから」、「陸前高田の博物館 不明職員の力作 収蔵品回収の命綱」と報道しています。この方は、本当に残念なことにお亡くなりになったのですが、この仕事というのは、メタデータをつくっていることです。それを単に紙に書いてタグをつけるだけではなく、ラミネートしてしっかりとこの資料につないだから、朝日新聞に書いてありますように、収蔵品回収の命綱になった。あなたのタグがあったからということです。

すなわち、この誠実な作業こそがドキュメンテーションだということです。皆さんの現場であるライブラリにおいても、ミュージアムにおいても、アーカイブにおいても、こういった仕事があるから、MLA連携の基礎が築かれて、テクノロジーとしてのデジタルアーカイブ、あるいはインターネットといったものをどんどん駆使して、連携を進めていく。すなわち、こういった土台が築かれるということになると思います。

その人がそうやったということは、Mの人間も、Aの人間も、皆さんのようなライブラリの方も同じようになされていることだと思います。そういう意味では、連携の基盤は例えばこういう仕事にあるということにおいては、Mの人間、Lの人間、Aの人間に共通している。そういう基盤があるということにおいて、連携の可能性があると考えられますし、特に連携を推進していただく大きなパワーは、皆さんのような方にあるということをもう一度考えていただきたいということと、ぜひ皆さんの図書館には皆さんのコミュニティのミュージアムの刊行物を1カ所にまとめるような棚をつくっていただくと、Mの人間として言うと、まさにそれがMLA連携になるのではないかと思います。

いろいろなことを駆け足でお話ししましたが、自分の中のMLA連携の歩みとともに、今日の課題についてお話しさせていただきました。ご清聴どうもありがとうございました。(拍手)

了

i 「美術資料をめぐる 外なる/内なる ネットワークを考える」『現代の図書館』34巻3号,p.151-154,1996.09

ii 「デジタルアーカイブとMLA連携：原理の整理の試みとして、あるいは「情報学は雄力マキリである」を想起して」『アーカイブス学研究/日本アーカイブス学会』15号,p.38-45,2011.11

iii 「日本の美術館ホームページにおける作品情報発信の概況」『学芸員研修会報告書』,2014